

植松日医会長に聴く

医師会がめざすもの



植松治雄 日本医師会
会長

藤森宗徳 県医師会
会長

藤森 植松会長は昨年4月に日本医師会の会長に就任され、その後、参議院選挙、世界医師会東京総会の開催、混合診療解禁反対国民運動の展開と、大きな成果を残されました。しかし、医療をめぐる社会環境は相変わらず厳しく、そのような中で日本医師会は今後、何をめざし、何をすべきかについて、お考えを伺いたいと存じます。

植松 まず、昨年末の混合診療解禁反対の国民運動にご協力いただいたすべての方々に、厚く御礼申し上げます。おかげさまで、650万人を超える署名を国会に提出し、それを強力な背景として所期の目的を果たすことができました。

この国民運動を通して痛感し、再認識したのは、医師会は今後、さらに国民の皆さんと歩調を合わせ、結束を深める努力をすべきではないかということです。その意味で私は、地域住民の方々に最も身近なところで活動をしている都市区医師会、都道府県医師会との連携強化こそが、国民医療の守り手である日本医師会にとって必要不可欠であると考えております。

藤森 植松会長のご提唱で、「国民医療推進協議会」が発足し、それに呼応して私共も県内医療関係11団体からなる「千葉県医療推進協議会」を立ち上げ、署名活動・県民の集い・デモ行進などを行いました。医師会が先導し、医療推進協議会という形で「国民と共に」市

民と共に」をスローガンにした新たな運動母体が全国にできたことは、有意義でした。

植松 そうおっしゃっていただくと、ありがたいですね。この医療推進協議会を大事に育てていくことが、今後の医師会活動の大きなテーマの一つです。

住民の目線に立った地域医療活動

藤森 植松会長は、堺市医師会会長、大阪府医師会会長を歴任された後に日本医師会の会長になられたので、地域医療活動について精通しておられます。しかも、開業医として地域住民の方々と日頃、身近に接して来られました。そういう方がトップになられたことは、医師会のみならず国民にとって心強い限りです。私は、植松会長が堺市の医師会長時代も、大阪府の医師会長時代も親しくお付き合いさせていただく機会がありましたので、お人柄はよく存じ上げているつもりです。特に府医の会長にご就任された時に、これを自分の第二の人生として、診療は縮小して会長職に全力を投じるというお話には感動しました。さらに、日本医師会の会長選挙に出馬された時、診療所を閉院されたのには驚き、心を動かされました。背水の陣で臨まれていると……。

植松 私なりに、はじめをつけたかったからです。日医会長というものは、診療と両立できるほど楽なものではないと思います。



植松 治雄 日本医師会会長

うえまつ はるお プロフィール

大阪大学医学部卒業後、大阪府堺市に耳鼻咽喉科の診療所「植松医院」を開業。堺市医師会会長（1984年～1990年）大阪府医師会会長（1990年～2004年）を経て、2004年4月1日に日本医師会会長に就任、現在に至る。

医師会について言えば、私は日本医師会の会長も、都道府県医師会の会長も、郡市区医師会の会長も、組織の大小の違いはあっても基本的には同じ立場だと考えております。なぜなら、医師会の存立の原点は地域医療にあるからです。その意味で私は、特に地域医療の最先端で活動をしている郡市区医師会と日本医師会との連帯を強固にしたいのです。

藤森 県内には23の郡市区医師会（地区医師会）がありますが、最近は各地区の会長の意識が高まっていることを実感しています。県医師会にもどしどし意見を言っていますし、日本のレベルから議論ができる論客も多く、県医師会の会長だとただ威張っているわけにはいきません（笑）。

植松 私の場合も同じです（笑）。上意下達では事がうまく運ばない時代です。地域医療活動において、医師が心すべきは「地域の方々や患者さんと同じ高さの目線で見えて、考え、発言し、行動する」ことだと思います。

ます。医師だからとふんぞり返っている、誰も近寄って来ません。診療所から一歩出た時は、普通の「おっちゃん、おばちゃん」で、先生「ではだめです（笑）。肩書きとは関係なく、一人の人間として地域の中で活動をする医師が増えれば、医療や医師会に対する信頼性は自ずと高まります。

藤森 私は小児科医ですが、赤ちゃんでも上から見下ろさないようにして、必ず目線を同じ高さにして診察・治療をすることを心掛けてきました。事を進めようとする場合、威圧感を与えてするのは、あるいは安心感を与えてするのは、相手の受け止め方が違ってきます。医師会活動も同様だと思います。

ところで、植松会長が医学の道に進まれた動機はどんなことだったのですか？

植松 きっかけの一つは戦争中に妹を疫病で亡くしたこと、もう一つは終戦直後に大阪の地下鉄構内でホームレスの方々の死に直面したことです。今のように国民皆保険制度のな

い時代ですから、重い病気になるとお金持ち以外は医療とアクセスできずに、むざむざ死を待つしかなかったのです。

藤森 それを考えると、今の「いつでも、どこでも、だれでも安心して平等に医療を受けることができる」国民皆保険制度は、ありがたい制度ですね。にもかかわらず、小泉政権は財政難を理由に医療費削減、医療への市場原理導入を推し進めようとしています。その行き着く先は、国民皆保険制度の改悪です。

植松 医療は社会共通のもので、市場経済の原理で医療を変えようという考えは、国民皆保険制度を崩壊させます。国民の皆さんは、少ない患者負担で、質の高い医療を求めています。めざす方向は、医師会も同じです。ですから、医師会としてはあくまでも「国民皆保険制度を堅持することが、安全で安心な医療を守ることになる」という主張を貫いてまいります。この態度を崩さない限り、国民の皆さんには必ずご理解いただけ、行動を共にしていただけると確信しております。

”病気を診る前に人を診る” 医師の育成

藤森 現在、千葉県医師会として強くアピールしているのは、「かかりつけ医を持ちましよう」ということです。「かかりつけ医」は有名な医師や大病院の医師である必要はなく、近所の開業医で親身に対処してくれる医師で



あればいいのですが、昔のように親子何代かにわたってお付き合いがあるケースが少なくなり、新たに探すとなると躊躇される方も多いようです。

植松 医師と患者さんの間にも「相性」があります。名医と言われる医師でも気に入らなかつたら、相性の良い「かかりつけ医」が見つかるまで、あちこち訪ねるべきです。不思議なもので、自分が嫌いと思えば相手も嫌います(笑)。

医学・医療が進むと細分化・専門化志向が強まり、その反面、人間存在をトータルに捉える全人的医療が置き去りにされる傾向があります。「医師は、病気を診る前に人を診よ」という至言がありますが、患者さんの病歴はもとより、生い立ち、家庭の状況、生活環境、趣味などの人格を形成する背景を把握してこそ、幅の広い実質的な医療が可能になります。

本来、そうした役割を担うのが「かかりつけ医」です。日本の地域社会は、人間関係や連帯意識が希薄になり、崩壊寸前です。医師会の地域医療活動は、地域社会の再建という面でも大きな意義を持っていると思います。
藤森 近頃、盛んに医療の質の向上ということが言われますが、技術面以上に医師の人格向上も課題ですね。

植松 ええ。医師には、高い倫理性と常識や感性を備えた基本的な人格が求められ、その上に医学・医療がなければなりません。日本

医師会の生涯教育制度も、医学的課題だけでなく、倫理や人間としてのありようを基本的医療課題として取り組んでおります。医学・医療はどんなに進歩しても、要するに「人」なのです。したがって、医師はもとより医療に携わる人は、人とうまく接し、生命を十分に尊重できる人でなければなりません。

藤森 昨年に開催された2004年世界医師会東京総会で、植松会長は「今、医療に求められるもの」と題した講演の中でも、全人的医療の原点は「かかりつけ医」にあると強調されておられたのが印象に残っています。

植松 実は、開催国の医師会長は講演をしないのが原則で、私の場合は例外的に認めていただいたのです(笑)。東京総会には、加盟82カ国医師会のうち41カ国医師会の代表の他、国際赤十字などの国際機関のオブザーバーを含む海外220名、国内300名の参加者が集い、会議・学術集会・各種社交行事を挙行しました。

レセプションには天皇・皇后両陛下のご臨席を賜った上に、わざわざ壇上から降りられて海外の来賓の方々と対話をされておられました。それが陛下からのご希望だったと後で伺って、感動を深めました。

共感を呼ぶ国民運動の展開

藤森 今後の、ご抱負をお話してください。

植松 日本医師会としては、国民の皆さんが共感し、支持していただける、さまざまな国民運動を積極的に展開していきたいと考えております。そのために、会内に各種委員会・プロジェクトを設置し、例えば藤森先生に委員になっていただいている禁煙推進委員会(プロジェクト)は、禁煙キャンペーンで大きな成果を上げています。

さらに、新たに糖尿病対策協議会を発足させました。年間1万3000人も透析患者さんが増え続ける現状では、早急な予防措置を講じる必要性を痛感したからです。このような場合、本来は行政が費用負担をすべきなのですが、財政削減でどうにもならず、日本医師会が費用負担をすることにしました。

政府は相変わらず「改革」を旗印にした施策を実行しようとしています。その改革には人間的な「温かみ」が感じられません。そんな政府に対して私は、社会保障費が膨らむからといって医療費を抑制すべきでなく、むしろ増やすべきではないかと主張してきました。すると、決まって返ってくる言葉は「その財源はどうする?」です。それを考えるのが、政治というものではないでしょうか? だからこそ、国民運動が必要なのです。

藤森 本日は、ありがとうございました。